

はじまる

小中一貫教育 その①

～中一ギャップを乗り越えろ～

中一ギャップとは？

中学校入学後、いじめや不登校が急増したり学習についていけなくなる子どもが増えたりすることから、小学校と中学校の間には、目に見えない段差のようなものがあるのではないかといわれてきました。これを「中一ギャップ」と呼んでいます。このことは、児童生徒の心と体の成長の問題、小学校と中学校の学習の進め方やスピードの違いなど、さまざまな原因が複合的に重なり合っていると考えられています。

インタビュー① ～子どもたちの声～

第一中学校区の四日町小学校 6年生に話を聞きました

若林 諒さん

中学校では、先輩後輩の関係とか、少し勉強のことが不安です。特に理科かな？中学校の先生は、少し怖いイメージがあるので、できれば優しく教えてほしいです。中学では陸上部に入って、長距離の選手になりたいです。大人になっても続けたいと思っています。



金子 美貴さん

小学校で、好きなのは算数です。中学校では、部活も勉強も頑張りたいと思っています。勉強で心配なのは英語です。中2になったら、中1の後輩のみんなに、「あんな先輩になりたい」って思われる人になりたいです。違う小学校の人とは結構友達がいるので、今のところ新しい友達のことはあまり心配していません。

市内の小学6年生に 「中学校へ行って不安に感じること」 などについてアンケートしました

【中学校へ行って心配なことは何ですか？】

勉強…75% 実に、4人に3人が勉強に不安を感じています。
新しい友達、部活動、上級生…50%

【自分が好きですか？（自己肯定感）】

小6…51% 中学校では英語や専門的な授業、部活動や体育祭など、新しいことを体験し自分の可能性や良さに気づくことが多くなりそうですが、自分に自信がもたなくなっていることが分かります。
中1…32%

【自分から進んで勉強しますか？】

小6…81% 中学校では勉強が難しくなる上、定期テストもあるのに、進んで勉強しなくなるという実態が見えてきました。
中1…68%

【休日に一緒に出かけるのは家族？それとも友達？】

小6…
家族と53%、友達と41%
中1…
家族と32%、友達と66%

家族と友達の割合が逆転するのが、小6と中1の間です。中学生になると友達との関係を重視している様子が見えてきます。

中一ギャップが生じてきた背景

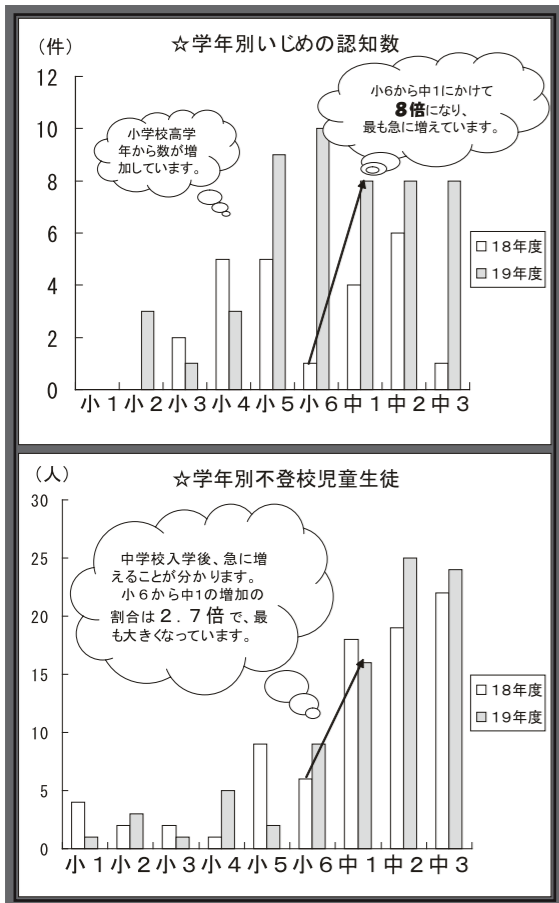
三条市の教育制度等検討委員会の最終報告には、中一ギャップが生じてきた背景を次のように指摘しています。
(1) 少子化により集団性・社会性が十分に育っていないこと

子どもが地域にたくさんいたときは、子ども独自の社会があり、集団遊びなどを通して、きまりの大切さや我慢すること、友達とのかかわり方を学んできました。そして地域社会の行事にも参加し、主体性や責任感を学び、中学校で生きていくための力を十分身につけて入学しました。しかし、そういう経験が少ない子どもの多くは、目の前の壁を乗り越えたり新たな集団の中で過ごしたりすることを、とても苦手にしています。

(2) 心と体の成長の早期化

思春期は中学生特有のものと考えられていました。ところが最近の子どもは、以前より2・3年心と体の成長が早まり、その結果、思春期特有の心が揺れる時期（友達や自分のことで悩むなど）と中学校入学の時期が重なったといわれています。それが大きなストレスになると考えられています。

いじめ・不登校の「数字」から見えてくるもの



【いじめ】

19年度に急増しているのは、いじめの定義が18年度に変わり、より丁寧に児童生徒のことにすることになった結果だと考えられます。また小学校の高学年から、数が増えることが分かります。特に18年度に小6だった児童が、19年度に中学校入学後、急増しています。

【不登校】

小学校の高学年から増え始め、中学校でさらに増えることが分かります。18年度の小6の児童が6人だったのが、19年度に中学校入学後16人に急増しています。増加の割合は2.7倍で、最も大きい増加率になっています。中学校では、その後も増加していく傾向にあります。



インタビュー② ～生徒の意見から～

中学校へ入る前の不安を聞きながら、いじめ不登校の問題点をどうやって解消できるかをテーマに、第三中学校の1年生と話し合ってみました（以下、意見交換会へ）。

参加者は、加藤美里さん、桐生美香さん、高橋梓さん、片岡賢人さん、小林洋介さん、山口智輝さん、宮島光樹さん、司会（教職員、山本哲哉）

中学生になると感情的になりやすくて、少し何かいわれても傷ついたり、そういう時期だから、いじめや不登校が起こりやすいと思います

司会 小学6年生のとき、中学校へ入学する心配や不安がありましたか。

片岡 ほかの小学校の人とうまくやっていけるかどうか心配でした。

小林 先輩との上下関係が心配でした。

司会 それって部活動のこと？

小林 そうです。

宮島 先生も友達も、新しく会う人とうまくできるか心配でした。

山口 勉強が小学校より難しくなるかなというのと、先輩、後輩の上下関係がうまくいかなくて不安でした。

加藤 勉強のことが心配でした。

桐生 小学校のときの友達との関係や新しい友達ができるか不安でした。

高橋 制服とか体操着とかの裏校則（校則にはないけど、1年生は黒いソックスをはいたらだめとか）が心配でした。

加藤 先生が教室にいたり遊んでくれたりしたような気がするけれど。

加藤 中学生になると感情的になりやすくて、少し何かいわれても傷ついたり、そういう時期だから、いじめや不登校が起こりやすいと思います。

司会 そういったいじめや不登校を先生たちも減らしたいけれど、どうすれば苦しんでいる子が減ると思いますか。

片岡 小学校のときから先生が気になる子どもに寄り添って注意するときにはきちんと注意する。それから、小学校も中学校も親と先生がもっと一体になって子どものことを考えていけばいいと思います。

小林 さつき片岡さんがいったけど、中学校でも休み時間とかに先生と一緒にいる時間が増えるといい。

山口 小学校低学年の小さいときから道徳やいろいろな場面で常識的にしてはいけないことを身につけさせていけば少なくともいいと思います。

宮島 小中どちらにもいえることですが、言葉だと伝えにくいので、「いじめ根絶ボックス」とか作って、悩みを書いて入れてもらうとか。

高橋 小学生と中学生と一緒に何か楽しいこと、三中だったら3つの小学校の子と中学生がレクリエーションとか勉強とかをするのいいと思います。

桐生 部活が違うと時間帯が合わない。学級にいる時間は長いけれど、部活の方が楽しい雰囲気というか。

山口 一緒にスポーツをしているので。

司会 学級と部活の友達どちらが大事かな？（部活3人、どちらも4人）

小林 小学校との違いは部活もすごく大事になるということだね。

桐生 ここから少し難しい質問になります。全国的に小学校から中学校になると急に「いじめ」と「不登校」が増えるけれど、どうしてだと思いますか。

小林 インターネットとかで、口でいえないことも文字だと簡単に嫌なことを書き込んだりできるじゃないですか。それが原因だと思います。

桐生 テレビでもいってたんですけど、中学生でも携帯電話の学校裏サイトとかで、悪口を書かれて学校に行けなくなるんだと思います。

片岡 小学校と違い授業によって先生が変わるし、小学校では昼休みに

桐生 部活の友達と多く遊ぶのはなぜですか？

桐生 部活が違うと時間帯が合わない。学級にいる時間は長いけれど、部活の方が楽しい雰囲気というか。

山口 一緒にスポーツをしているので。

司会 学級と部活の友達どちらが大事かな？（部活3人、どちらも4人）

小林 小学校との違いは部活もすごく大事になるということだね。

桐生 ここから少し難しい質問になります。全国的に小学校から中学校になると急に「いじめ」と「不登校」が増えるけれど、どうしてだと思いますか。

小林 インターネットとかで、口でいえないことも文字だと簡単に嫌なことを書き込んだりできるじゃないですか。それが原因だと思います。

桐生 テレビでもいってたんですけど、中学生でも携帯電話の学校裏サイトとかで、悪口を書かれて学校に行けなくなるんだと思います。

片岡 小学校と違い授業によって先生が変わるし、小学校では昼休みに



いじめ・不登校の原因って何だろう？



インタビュー④ ～先進校の声～

先進地教育の事例紹介



東京都三鷹市立第二中学校
校長 大嶺せい子さん

Q 三鷹市の小中一貫教育について教えてください。

A 平成18年4月に、コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育校「にしみたか学園」ができました。「三鷹方式」と呼ばれ、既存の学校を存続させたまま行っています。三鷹市の公立小中学校は、小15校、中7校ありますが、平成20年にすべての小中学校に学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールになりました。平成21年度には、すべての中学校区が小・中一貫教育校となります。

Q この取り組みを通じて成果があったら教えてください。

A まだ、スタートしたばかりなので、十分な検証はできていませんが、平成17年度に14人いた不登校の数は、平成20年度には7人になりました。地域の温かい協力、小中教員の相互交流による手厚い指導、個に応じた指導などの成果をとらえています。また、人を認める気持ちや自尊心といった児童生徒の心を安定させることが、学力向上にもつながっていくと信じています。

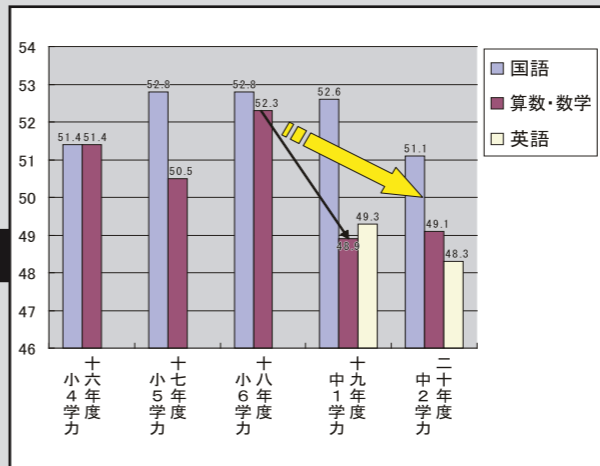
*コミュニティスクール：保護者や地域の声を学校運営に反映させた学校づくりを目指すもの。

学力が下がっている理由を探る
5・6年をピークに、NRTの学力、特に算数・数学は急に下がっていくことが分かりました。教科や授業に小・中のギャップがあるとすれば、それはどんなことでしょうか。

(1)授業そのものの進め方やスピードの違い
一般的に小学校は、基礎的な学力をどの子にもつけようとして丁寧に行うといわれています。中学校は、学習内容が多いため、ときばきとテンポよく進む授業が多いようです。ノートに早く書いたりしつかり覚え

たりすることが多く求められます。
(2)環境の違い(教科担任制など)
中学校で授業時間が5分増えること、教科担任制(教科ごとに先生が変わること)になること、長い範囲のテスト(定期テスト)と評定が1.5に変わることなどが大きな違いです。教科担任制の中学校では、多くの目で見てもらえる反面、そのかわりは、小学校の担任に比べて薄くなるようです。
(3)児童生徒が考えたり発言したりすることを疎んでくることがあること、自分の意見をもち発言することなどは、学力を支える大

事な力です。しかし、学年が上がるにつれて、進んで考えたり発言したりしなくなる傾向にあります。話し合い学び合うことが少なくなると、十分に学力を伸ばしにくくなります。
(4)友達や部活など多様なかわりの中で
中学校では、部活動に熱中するあまり疲れてしまったり生活が部活動中心になったりして、学校や家庭での学習に集中できない生徒もいるようです。思春期真っただ中の中学生が友達関係でうまくいかないことがあると、学習しようという意欲も高まりません。



学力グラフに基づいた三条の姿(学力実態から)

15年度から取り組んでいるNRT(全国標準学力検査)の結果を使って児童生徒の学力実態を紹介します(今回は、NRTで把握できる学力のみです。この検査ですべての学力が把握できるわけではありません)。

この検査は、中3を例にとると、進級した4月に中2の問題を受けます。中3では中2の学力の定着度を把握することができます。そのため、グラフには中2学力と書いてあります。毎年同じ児童生徒の結果を調べているので、どの学年の時に力をつけているかが分かります。全国の平均は50(偏差値)。50を超えていれば平均以上ということになります。

(1)ここ数年の学力推移は同じ

ここ数年、「小学校では平均以上」、「小5・6をピークに下がっていく傾向」にあります。

(2)算数・数学にも中一ギャップ

国語は毎年50を超えています。中学入学後低下していきます。英語は小学校での検査がなく数値はありませんが、中1時点から50を下回っています。算数・数学では両年とも小6から中1にかけて約3ポイント下がり、平均を下回っているのが分かります(中1から中2にかけて数ポイントですが、上がっています)。

(3)学年が進むにつれて下位層が増える傾向

ここにはありませんが、中学入学後、学習内容が難しくなるため、下位層の生徒が増える傾向にあります。

平成20年度「中3」のNRT学力偏差値比較グラフ

子どもたちの学力が関係している

今の子どもたちの学力数値から見た学力低下の原因とその理由について分析する。その結果から見えてきたものは、やはり小学校と中学校の間にある壁である。

インタビュー③ ～保護者の声～

保護者に伝わらない現状

現在も小・中学校の連携は進んでいると思いますが一方で、子どもの世界はあまり変わっていないようにも感じています。

なぜ小中一貫を推進するのか。小中一貫の肝心な部分は、学習のカリキュラム編成だと思います。子どもたちや教職員の先生方がどのような動きになり、さらには、そこに保護者、地域の方々がどのようにかわっていくのかが見える内容のカリキュラムです。

多くの保護者も、子どもにとって良いことをしようとしているんだと、漠然と感じていますが、まだ具体的な内容が見えないので、分からず、不安が先立つのだらうと思います。

カリキュラム編成などの具体的な中身が見えてくれば、さまざまな建設的意見が出てくると思います。

専門的なことなので教職員の先生方の負担は決して少ないとは思いますが、あまりに過大になりすぎてはいけません。



三条市PTA連合会会長 岡田竜一さん

インタビュー⑤ ～先生の声～

力向上はきつと実現すると思えます。



【第一中学校教諭 権瓶浩子さん】
学習での小中のギャップは、教科担任制、学習内容の増加、定期テスト、通知表などでしよう。授業ではノートを取ることや覚えることが多くなります。中学生は、小学校に比べ、部活、委員会、塾などで急に忙しくなります。パソコンや音楽など個人の世界も広がるので、家でじっくり学習をすることは、小学校より減っているかもしれない。学力の低下傾向は、ここにも原因があり、家庭学習や宿題の活用については中学校の課題と考えます。小中一貫教育での期待は、小中の先生方が仲良くなり、子どものことを一緒に考え、「9年間のカリキュラムで育てていくことができること」に尽きるのではないのでしょうか。授業や家庭学習など、小と中がそれぞれの良さを学び合えば、学力向上はきつと実現すると思えます。



四日町小学校教諭 桑原一之さん

【四日町小学校教諭 桑原一之さん】
学習での小中の最も大きなギャップは、進度(スピード)の違いだと思います。中学校では学習内容がぐっと増えるので仕方がないのかもしれませんが、中学校に入ってから学力が下がっていくことについては、内容が難しくなることや部活で疲れ、家庭学習時間が減ることなどが考えられます。小学校で「教師から自立してやる力」を育てていないことも大きな要因だと考

小学校と中学校の違い、現場ではどう考える

インタビュー⑦ ～先進地の声～

先進地教育の事例紹介



ひょうが だいたいに
宮崎県日向市立大主谷小中学校
小学校と中学校が「学びのかけはし」と呼ばれる長い渡り廊下でつながっています

宮崎県では、「明日の宮崎を担う子どもたちを育む第2期戦略プロジェクト」として5つの重点事項を掲げています。その中の1つが、「地域の特性を生かした多様な一貫教育推進」です。

現在、宮崎県30市町村の中の17市町が積極的に一貫教育の研究に取り組んでいます。また、県内のすべての中学校区で、小中連携による一貫教育を推進するため、各地域の拠点となる中学校（県内の1/3）に「小中連携推進教員」を、県内の全中学校に校区内の全小学校にかかわる「兼務教員」を委嘱しています。

宮崎県は、東国原知事で有名ですが、小中一貫教育でも日本をリードしている県といえそうです…。

事例紹介 宮崎県教育庁学校政策課

主幹 今村 卓也 さん

三条市でも小中一貫教育を推進するとお聞きし、大変期待しています。小中一貫教育の導入は学力向上や心の成長に効果的だといわれていますが、それはあくまでも結果です。小・中学校がさまざまな部分で連携し合い、互いの異文化を理解し合いながら、9年間を見通した意図的な取り組みを重ねていくことが大切です。先生方の努力はもちろん、保護者や地域の理解が欠かせません。児童生徒のしつけや学習習慣の確立、生徒指導的な部分での安定は、学力向上につながる大事な部分です。

先進校の成果を礎とし、宮崎では日向市に続き、他の市町でも一貫校の開校が予定されています。



上 三条市教育制度等検討委員会での検討の様子
下 中学校への不安や希望を語る四日町小の児童

小中一貫教育基本方針策定の経緯

平成20年11月に市教育委員会で策定した「三条市小中一貫教育基本方針」は、「小中一貫教育」を推進するための基本的な考え方や方策をまとめたものです。

これまで、市では「三条市教育基本方針」に基づき、次代を担う心豊かな

子どもたちを育んできましたが、更なる子どもたちの可能性を伸ばすために、学校教育の課題について「三条市教育制度等検討委員会」で検討してきました。そこで、中一ギャップなどのさまざまな課題を解決するためには、「小学校と中学校がより連携しやすい環境をつくるために必要な小中一貫教育」を導入することが適切であるとの最終報告を受けました。

市では、この報告を尊重しながら、地域や学校説明会などでの意見も踏まえつつ真摯に検討してきました。そして、昨年8月に「三条市小中一貫教育検討委員会」を設置し、三条市の小中一貫教育の在り方について検討いただき、その意見を踏まえた上で、基本方針として取りまとめて決定しました。

変わる教育環境のなかで

～将来を見据えた教育モデルが果たす役割と市が進める連携型教育～

インタビュー⑥ ～検討委員の声～

三条市小中一貫教育
検討委員会委員

鈴木昭司さん

今の中学生を見てみると、確かに中一ギャップと呼ばれる課題があることを感じます。

子どもから見た、その原因の一つは小学校と中学校での授業の進め方の違いだと思います。小学校は学級担任制で、担任の先生が学校で児童のこと全般を把握しています。一方、中学校は教科担任制で、担任授業以外では生徒との関わり合いは薄くなります。そういったことが子どもによっては、非常に大きな違いと感じられるのだと思います。

中学三年間は、学習でも部活でも自分で目標を持ち成果をつかみ取る、すなわち自立し、変化に対応できる「生きる力」を身につけることを学んでいくための大事な時期です。ですから小学校から中学校への移行がうまくいくことが非常に大切になります。

小学生の中学校へのあこがれと不安は、高学年になるほど強くなります。小中一貫であれば、小学生のうちから、中学生との合同運動会などで一緒に入場行進や応援合戦をしたり、文化祭でいっしょにコーラスをしたりと、子どもの不安を取り除きながら、学習面（教科担任制）でのスムーズな移行や自然に良好な人間関係も築いていけるのではないかと期待しています。



「生きる力」を身につけることを学んでいくための大切な時期

「中一ギャップ」が解消されるまで

父：小中一貫教育が始まって、お父さんの子どもの時代と少し変わってきているみたいなんだけど、違いとかちょっと教えてくれないか？



ぼく：うん、いいよ。例えばね、この前隣の小学校の友達と一緒に、外国語活動の勉強をしたよ。だから、もう隣の小学校の友達ができんだ。中学校へいっても安心だよ。そうそう、運動会では小中一緒にやってるんだ。中学校のお兄ちゃんの走りはかっよくて、ぼくもあんな人になりたいって思ったよ。他には、こんなことがあるみたい。右側を見てみて…。



父：へえ～、いろいろあるんだね。お父さんも学校に行きたくなってきたな。



*各中学校区ごとに具体的な取り組みを決めています

授業スタイル



小学校の高学年では、教科担任制や小中教員による授業が一緒に行われることが多くなります。丁寧さと専門性が融合した授業で、子どもの学習意欲や学力を伸ばします。

音楽祭では



中学校区単位での音楽祭が可能になり、中学生の歌声を聞き、あこがれや尊敬の念を抱くことでしよう。中学生の自分の良さを認める気持ちや役に立てているんだという気持ちを育てます。

あいさつ運動



あいさつができる子ども。これは、地域や家庭の願いです。学校だけでなく中学校区で行うことで、あいさつの輪が広がります。中学生が手本になって活動することでリーダー性を伸ばします。

いじめ根絶集会



1つのテーマを小中協働（中1・2・3、小6）で話し合ったり考え合ったりします。これまで以上にいじめについて関心をもったり、いじめをなくそうという気持ちを育てることができると期待しています。

1月24日に教育リレーフォーラムが開催されました



「小中一貫教育」をテーマに、約280人の保護者、PTA、教員などが参加して行われました。先進的に小中一貫教育を進めている、東京都品川区教育長の若月秀夫さん（写真左



下）からは、冒頭に「私は、三条市の取り組みの応援に来た」と先駆者としての熱いメッセージを頂きました。

若月教育長は、学力がテーマの第2分科会にも参加し、市内の先生方の熱心な協議を聞いた上で、「三条の先生方はレベルが高い。また、小中一貫教育を何とか成功させようと、目の前の児童生徒のためにできることを実践しようとしている」と感心しながら、会場を後にしました。

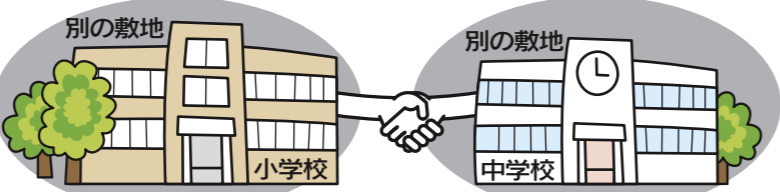
インタビュー⑩ ～保護者の声～

参加者 坂上芳子さん（一ノ門二丁目）

教育リレーフォーラムという、いかにもお堅い感じですが、文部科学省の前川審議官のユーモアある基調講演やパネルディスカッションでのパネラーの忌憚のない意見を聞いて、これまでより小中一貫教育のイメージをはっきりととらえることができたと思います。中一ギャップについても、子どもたち自身が、中学校の良さを実際に見聞きすることで、解消につながっていくのかなと感じました。中学生になると教科担任制になったり、これまでと違い、急に大人扱いされたりと自分の意思、判断が求められるようになります。子どもたちには小・中の強い連携によるサポートが必要で、小中一貫教育が子どもたちのためになるのだと少し見えてきたように感じました。



「**連携型**」の小中一貫教育からスタート



小中一貫教育には、「連携型」「併用型」「一体型」があります。三条市では、どの中学校区も、まずは「連携型」の小中一貫教育を進めます。

「連携型」は、近隣の敷地が別々の小学校と中学校で、教員や児童生徒が移動して学習したり活動したりします。ですから、今ある学校が、すぐになくなることはありません。モデル中学校区は、「併用型」や「一体型」を視野に入れた検討も行います。

*モデル校については、本紙4月1日号で特集します
問い合わせ 学校教育課指導担当
☎(45) 1112内線222



や不登校の激増につながっています。小学校では家庭的な指導が、中学校で

全国的に注目された取り組みに期待
文部科学省大臣官房審議官 前川喜平さん
小中一貫教育は、全国的に注目の取り組みであることは間違いないと見ます。小中9年間を一つのくくりとして考えるようになってきたのは、中学校をめぐる問題が表面化したからです。入学して小学校とは違う環境にいやなく追い込まれて、卒業時には受験・就職のストレスがあることが、いじめや不登校の激増につながっています。小学校では家庭的な指導が、中学校で

は社会的な厳しさを教えるような指導が行われてきましたが、今その違いを乗り越えられる子どもは少なくなっています。また、教員の在り方にも大きな違いがあります。教員の仕事の内容、子どもの見方、授業の進め方、顔つきまで違う感じがします。中一ギャップの解消、小中教員の学び合い、子どもの数の減少対策など、さまざまな問題を解決する一つの方策が、小中一貫教育です。文部科学省としても大きな関心を寄せています。制度上の課題や免許状の課題は残っていますが、今後、具体的に国の施策につなげていくか、中央教育審議会でも、小中の連携の在り方について協議していく予定です。

インタビュー⑨ ～行政の声～

今、社会経済環境が大きく変化しています。特に核家族化や地域コミュニティが衰退している状況の中で、子どもたちを取り巻く環境は、昔とは違ってきていると感じています。実際に今、公園などで子どもたちが遊んでいる風景をなかなか見掛けないようになってきているのではないのでしょうか。これは三条市だけではなく、全国的にもいえることです。子どもたちの社会づくりが構築しづらい状況にあって、子どもたちがきちんと成長していくためには、まずは今の子どもたちにふさわしい教育環境を準備する必要があります。いろいろな教育環境を準備する必要があるのではないのでしょうか。縦や横のつながりに幅広く応え、連続性のある教育環境をつくっていくことはすごく大切だと思います。連携型については、小学校・中学校という縦の連携だけではなく、小学校同士の横の連携も併せて考えていかなければならないのではないのでしょうか。基本的には、それが小中一貫教育

刺激を受け合い、結果として教育そのものの取り組みにいい意味での変化をもたらすことを期待しています。小中一貫教育を推進している先進事例では、その部分からの効果があることも聞いています。特に学校の先生方も、

今の子どもたちにもふさわしい教育環境を準備する必要はあるのではないのでしょうか

いをしていく中で、知らず知らずの間に存在してきている地域と学校、PTAと先生とのちょっとした壁を、議論を通じて取り除くことができれば、小中一貫教育はさらにより良いものになると期待しています。

そのような意味でも、第一中学校区と第三中学校区で立ち上がった推進協議会では、ぜひ小中一貫教育の実現に向けて、いろいろな課題の整理に積極的に取り組んでほしいと思います。また、多くの方が議論に広く参画することと構築される小中一貫教育が、先生のためだけのものではなく、子どもたちだけのためでもない、やはり地域のものであり、保護者の皆さんのものでもあるということにつながっていくのではないかと期待をしています。

三条市長 國定 勇人

市長に聞いた。小中一貫教育がなぜ期待されるのか、その理由を問う

インタビュー⑧ ～行政の声～ 市長が期待する教育の在り方

導入の最大の目的でもあるわけですが、付随的に学力向上につながっていくかもしれないですが、まずは子どもたちが健やかに成長できるように環境づくりを目指す取り組みとして、小中一貫教育を進めていくわけです。もう一つには、小学校と中学校にはそれぞれの文化が培われていて、小学校と中学校の先生が相互に交流することで、よりお互いの良さを得ることができると思っています。先生同士が

小学校と中学校の交流を通じて、改めて教育の在り方について見詰め直す絶好の機会ではないのでしょうか。小中一貫教育は、地域の方々と一緒に進めていく必要があると思っっています。いくら良い制度（仕組み）をつくったところで、そこに魂が入らなければ何の効果も上がりません。地域と学校が話し合

